

## スポーツは副作用のない社会貢献の特効薬。 地元密着型の「クラブ」で絆を深めよう。

社会貢献フォーラム in 秋田 (2011年2月11日 秋田市民交流プラザ「ALVE」)  
社会貢献フォーラム in 松山 (2011年3月5日 松山市立子規記念博物館講堂)

全日本社会貢献団体機構では、活動の基軸のひとつである社会貢献フォーラムを、今年度は秋田県秋田市と愛媛県松山市の2都市で開催した。今回のテーマは「スポーツで築く地域の輪」。スポーツの持つさまざまな魅力と効果を再確認しながら、どのような社会貢献が可能であるかを探るフォーラムとなった。

### 基調講演

スポーツは家族間の信頼と地域の絆を強める無言のコミュニケーション。

フォーラムの第一部の基調講演は、スポーツジャーナリストの二宮清純氏が「スポーツから学ぶコミュニケーション力」というテーマで、これまでの取材経験を交えながら、スポーツと社会の役割について語った。

二宮氏はまず「チーム」と「クラブ」の違いについて話を展開した。

チームとはある目的(例えば優勝)などのために集まった人々の集団である。目的が達成できなければ、解散や売り渡しなどもあり得る存在である。これに対してクラブとは、それぞれの地域の生活に根ざし、未来永劫続いていくいわば「家系」のような存在であり、基本的には街の財産である。そして人々にとっては「心のインフラ」であると氏は説く。

「日本にはこれまでクラブはなかったと私は考える」。

企業が推進してきたために全てが企業名を冠したチームであった。ようやく日本にスポーツによる「心のインフラ」を築こうとしたのが、Jリーグである。今はまだ移転や消滅するものもあり、日本にクラブが定着するまでには時間がかかりそうだ。

これに対して、欧州では古くからクラブという概念が根付いている。二宮清純氏が、フランスで開催されたサッカーワールドカップを取材したときのこと。現地の小さな村でラグビーの大会に誘われた。訪ねてみると、そこで見たのは驚いたことに「500歳ラグビー」だった。



選手の中には、10代から70代までが混在していたのだ。三代目が出場している家族さえある。もちろん、ガチンコ勝負ではない。

高齢者に対してはやさしいタックルを行い、子どもがトライをしようとする直前で「世の中そんなに甘くないぞ」とばかりにタックルを見舞う。

子どもたちはそこで暗黙のうちに社会のルールを、

もっといえばルールの作り方さえも覚える。また、トライを決めた父の姿を見て、タックルされても倒れない祖父を見て、憧れを感じるはずだ。祖父は、孫の立派な活躍に目を細めるだろう。スポーツは家族間の信頼と地域の絆を強める無言のコミュニケーションなのである。

「日本には、学校教育と社員教育はあるが、社会教育はない」と二宮氏は語る。

クラブスポーツには、年齢や職業の異なる人々が集まる。そこでマナーや道徳、地域文化などが継承されていく。日本が失ってしまったコミュニティの回復と社会教育のためにも、地元密着型のクラブの創造が必要なのである。

### 『地産地消』のクラブ経営が、 地域社会を盛り上げる。

フォーラムの行われた秋田県は、有数のバスケット大国であり、bjリーグのノーザンハピネッツの本拠地だ。また一方の愛媛県は野球大国四国の一角をなし、四国アイランドリーグPlusの愛媛マンダリンパイレーツがある。さらには、サッカーJ2の愛媛FCもある。

二宮氏の講演はこうしたそれぞれの地域のスポーツの話題を織り交ぜながら、聴衆を引き込んでいった。

特に松山では、プロ野球16球団制を提唱し、セパに東西地区を作ることで、ポストシーズンマッチを増やすという考え方を提唱した。本拠地も四国や静岡、九州などに分散し、地元の選手を育てて起用していけば、日本中がもっと盛り上がり、付随する経済効果も高まる。

「地域振興という観点からも、クラブチームは大きな魅力を持っているんです」と氏は続ける。もっとも成功した例として、Jリーグのアルビレックス新潟をあげた。その発足の前、二宮氏が商工会議所などの依頼で地域振興策としてのクラブ設立を説明したところ、会場は静まり返った。

話はよくわかったが新潟ではとても無理、という反応だったのだ。それが今では、Jリーグでのトップクラスの観客動員数を誇り、老若男女が一体となって応援している。巨額の経済効果も現れた。

「そこで重要なことは『地産地消』だと思います」

これまでの日本のスポーツ選手の出世パターンは、地域で育成して大都市の大学や企業で活躍することだっ



二宮清純(スポーツジャーナリスト)  
株式会社スポーツコミュニケーションズ代表取締役  
東北楽天ゴールデンイーグルス経営評議委員  
日本サッカーミュージアムアドバイザーボード委員  
スポーツジャーナリストとして、世界各国でオリンピック、サッカーW杯、メジャーリーグ、ボクシング世界戦など、数多く取材する。

た。そうではなく、地域にクラブという受け皿を作って、選手を応援し育てていく時代になっている。それこそが地域分権、地域主権のあり方である。

そのための手法として、二宮氏は正三角形の論理を説明した。

正三角形の底辺には『普及』があり、その上に、『育成』、そして『強化』が位置する。もっとも重要なのは『普及』で、子どもたちにスポーツを好きになってもらう。また複数のスポーツを経験してもらう。これによって、底辺の面積が増え、適したスポーツに出会う機会も増え、トップのレベルも押し上げられるのである。

「健康にもいい、家族の絆も深まる、子どもたちはマナーや道徳を覚える、地域が結びつき、活性化。スポーツには悪いことがないんです。副作用ゼロの特効薬です。これはスポーツにしかできないことですよ」

チームからクラブへ。スポーツが変われば、地域が変わり、日本が変わる。二宮清純氏の基調講演は大きな拍手とともに終演した。



# スポーツは全員参加型。 だからこそ、社会貢献活動の原動力となれる。

社会貢献フォーラム in 秋田 (2011年2月11日 秋田市民交流プラザ「ALVE」)

**秋田県での社会貢献フォーラムは、2月11日に秋田市民交流プラザ「ALVE」で開催された。主催は全日本社会貢献団体機構、秋田魁新報社、全国地方新聞社連合会。あいにくの雪の舞う中で開催ではあったが、250人が参加し、熱気をおびたフォーラムとなった。**

子どもたちの笑顔が、活動のモチベーションをあげている。

冒頭、秋田魁新報社の熊谷清隆取締役営業局長が主催者を代表して、

「秋田県は元々スポーツ大国です。今日は子どもたちの将来を含めて、スポーツと地域社会の創造について皆様と学んでいきたい」とあいさつをした。

そして、二宮清純氏の基調講演の後、元NHKアナウンサーの松田輝雄氏をコーディネーターとしてパネルディスカッションが行われた。

最初に発言したのは、秋田県遊技業協同組合理事長の新井昌吉氏。秋田県遊協では、平成19年度から、子どもたちの健全育成を目的としてプロ野球OBを招いて少年野球教室を開いている。

「野球に対する姿勢や礼儀、あいさつなども厳しく教えております。泣き出す子もいますが、やはり元プロから学ぶということは大きな体験となります。練習後にサインをもらって嬉しそうにしているのをみると、今後も続けていかなければ、と強く感じます」と新井氏は語った。

このほか新井氏は写真を交えながら、福祉施設への車椅子寄贈、慰問活動、新入学児童への防犯ベルの配布など、同県遊協での社会貢献の取り組みについて説明した。

秋田魁新報社報道部次長の赤石昌之氏は、県内で昭和21年より行われているクリスマス慈善バスケットボール大会の例を紹介。元々は進駐軍と秋田師範学校との間の交流をきっかけとして、開催していたが、その慈善の意志が今日まで引き継がれ、入場料の一部は児童施設に寄付されている。赤石氏はさらに、県内のスポーツチームによる学校や施設訪問について紹介した。

**ルールを作る中で、人への思いやりやマナーも学べる。**

シドニー五輪銅メダリストの田中雅美氏は自身の経験を語った。

同五輪ではメダル候補と言われながら直前に体調を崩し、個人種目では惨敗。

「最後のメドレーリレーでは他のメンバーは調子がよく、私は泳ぐのが怖くなった」

それを救ってくれたのはチームメートの「このメンバーなら大丈夫」という言葉だった。

これを機に水泳は個人競技という意識から、人の支えがなければ成り立たないものだと痛感したという。

「その場で戦うのは個人なのですが、周囲のみんなと共にあるんです」

田中氏は現在、全国で子どもたちのための水泳教室を開いている。サインをあげても何も言わない子に対し



ては「なにもいうことはないの?」と田中氏は聞くという。ようやく「ありがとう」の言葉がでてくる。普段からあいさつを教えられていない現状は寂しいと田中さんは語った。

「スポーツを通じて、夢や目標を達成する喜びを知って欲しいし、達成できなくても悔しさを学ぶことも大切。チャンスを広げてあげるのが大人の役割だと思う」

二宮清純氏は社会教育の実践の場としてのスポーツクラブの役割について話を展開した。スポーツではルールを守るだけでなく、自分たちでルールを作っていくことも体験できる。三角ベースの野球などがいい例。自分たちで作った以上は守り、もしも不都合が生じたら変えるというトレーニングを小さな頃から体験することが重要だと説く。そういう中で、弱者や幼少者などへの手加減なども覚えていく。

「本来ルールは人を縛るものではなく、人を幸せにするためのもの。スポーツはそうしたことも学べる」と述べた。

**使命をもって、地球社会に根ざした社会貢献の輪の一翼を担いたい。**

コーディネーターの松田氏がパネリスト間の会話を引き出し、フォーラムは熱を帯びたものになった。最後にディスカッションを通じた感想と今後の展望について出席者たちが語った。

新井氏:社会貢献が幅広い分野で行われていることを実感しました。大げさですが私たちは使命をもって、地球社会に根ざした社会貢献の輪の一翼を担いたい。

赤石氏:今冬の大雪で、運動部の子どもたちが独居老人の家の雪かきを行いました。こうした社会貢献の実践の場としての機能と、地域が結びつくという機能によって、スポーツは地域社会を元気にできるものだと感じま

す。  
田中氏:世界で大きな戦争が起きていないのはスポーツの存在も大きい。人の闘争心をルールの中で消化でき、最後は握手をする。スポーツは生きがいにもなり、地域の輪にもつながります。

二宮氏:スポーツは祭りと同じで神輿を担ぐのは若者でも、バックアップするのは親や祖父の役割、いわば全員参加型です。この街に生まれてよかったと実感するためにも、スポーツはなくてはならない存在です。

最後に全日本社会貢献団体機構の松尾守人理事が「社会貢献は継続こそ重要であり、私たちもチームとなって続けていきましょう」と述べて、秋田県での社会貢献フォーラムは閉幕となった。

## 「スポーツ」を通じた絆の構築に努力を!

秋田県遊技業協同組合 理事長  
新井昌吉さん

社会貢献フォーラムが秋田県で開催されましたことは、長年の県遊協の社会貢献活動が評価された成果であり、改めて活動の在り方を再認識させられた機会になりました。

二宮・田中両コメンテーターの経験則に基づいた「地域密着型のスポーツクラブ」における親子3代が一緒にプレイする地域や家族の絆効果、子どもたちが夢や目標に挑戦するチャンスを広げてあげる大人の役割、選手や世代間交流による裾野の拡大、夢、活力の恩恵などの講話はスポーツが果たす機能として理解し共感できました。

かつて「ラグビー」「バスケット」「高校野球」「体操競技」などでスポーツ王国を謳歌した秋田県も、最近の長期低迷打開策として「スポーツ立県あきた」構想を立ち上げたところでありますが、私共のスポーツにかかわった社会貢献の継続支援活動が、その一翼を担えるよう使命感を持って善意ある皆様と手を携えて活動していく決意であります。

パネルディスカッション出席者

コーディネーター



元NHKアナウンサー  
松田輝雄氏

パネリスト



秋田県遊技業協同組合  
理事長  
新井昌吉氏



スポーツコメンテーター  
田中雅美氏



秋田魁新報社 報道部  
次長  
赤石昌之氏



スポーツジャーナリスト  
二宮清純氏



# スポーツを通じた社会貢献なら、自分たちも楽しんで続けられる。

社会貢献フォーラム in 松山 (2011年3月5日 松山市立子規記念博物館講堂)

**愛媛県での社会貢献フォーラムは、3月5日に松山市立子規記念博物館講堂で開催された。主催は全日本社会貢献団体機構、愛媛新聞社、全国地方新聞社連合会。道後温泉にある会場にはおだやかな日射しが降り注ぎ、約300人の市民が参加して、終始なごやかな雰囲気の中でのフォーラムとなった。**

プロ選手が子どもたちに「夢」を語る。

愛媛県での社会貢献フォーラムは、愛媛新聞社村上和土広告局長のあいさつで幕を開けた。

「本日はスポーツを通じて、地域の活性化と社会貢献を行うという大きな、また有意義な討論を行います。ぜひお話を楽しみながら最後までおつきあいください」

二宮清純氏の基調講演のあと、コーディネーターの松田輝雄氏がパネリストたちの発言を促した。

最初に愛媛新聞社編集局運動部の記者である久賀大輔氏がサッカーJ2の愛媛FCについて紹介した。

同クラブでは日本サッカー協会プロジェクトの一環で「夢先生」という活動を行っている。選手たちがどのように自分の夢を実現したのかを、子どもたちに語るものだ。同席の田中雅美氏もその活動に参加されていて内容を説明した。

1時間ずつのレクリエーションと授業がある。運動選手は夢をかなえる過程で、悔しい思いもたくさんする。それをどう乗り越えたかを語って、子どもたちに夢について考えてもらうのだ。

また愛媛FCには選手が児童といっしょに給食を食べ、遊び、掃除をする「給食先生」という活動もある。どちらの活動も身近で憧れの選手と接し、人としての選手を見ることで、地元チームのファンにもなり、自分も

いつか夢を叶えようという励みになっている。

次は愛媛県遊技業協同組合理事長の川井善廣氏。同組合は、愛媛マラソンの実行委員会に入り、人的、資金的な協力を行っている。当日は加盟店の従業員が沿道の整理を手伝い、応援部隊として歴史ある大会を支える。

「自分たちも参加することが重要です。スポーツならそれを楽しみながらできる」

また、一昨年はヤクルトスワローズの選手を招いての教室を開催。少年野球と少年女子ソフトボールの10チーム、約190人が参加した。

「基礎技術はもちろん、取り組みの姿勢や礼儀作法まで、青少年育成に主眼をおいたものになっています」

川井氏はその他、加盟店がビーチバレーの「エコカップ」やママさんバレーボール大会に協賛している例を紹介した。

**ずっしりと重いメダルには、周囲の思いも込められている。**

田中雅美氏はバルセロナ五輪で金メダルをとった岩崎恭子氏と同世代でライバル関係だった。

「スポーツは努力が必要ですが、隣の人も頑張っているとわかれば自分も頑張れるんですね」と田中氏。

パネルディスカッション出席者

コーディネーター



元NHKアナウンサー  
松田輝雄氏

パネリスト



愛媛県遊技業協同組合  
理事長  
川井善廣氏



スポーツコメンテーター  
田中雅美氏



愛媛新聞社編集局  
運動部  
久賀大輔氏



スポーツジャーナリスト  
二宮清純氏



岩崎恭子というライバルなくして、自分はいここまで成長できなかったと語った。

またシドニー五輪でのメドレーリレーの逸話とともに、獲得した銅メダルを持参して、聴衆の代表者にさわらせた。ずっしりと重いメダルには、指導者や家族、友人など田中氏を支えた人々の思いも込められている。スポーツで得られる喜びと結びつき、そうした思いを子どもたちに伝えたいと田中氏は語った。

二宮清純氏はスポーツにおけるルールについて、子どもの教育と絡めて論じた。

「ルールを守る子から、ルールを作る子へ、というのがキーワードになります」

スポーツの世界ではルールがよく変わるが、不平を言うだけでは成長はしない。

ルールを自分で作り、作った以上は守り、不都合が起きたら変えてみなさい…と、子どものうちから教えないと国際競争の場において戦うことはできない。

**スポーツがさらに地域社会に貢献できるシステムを作ろう。**

スポーツが大好きなパネリストが集まり、ディスカッションは活発なものになった。

まとめとして各人は次のように締めくくった。

川井氏：上部組織を含め、我々は社会貢献活動を非常に大切にしています。今日のお話をきいて、今後もスポーツを通じての活動を積極的に進めていきたいと感じました。

久賀氏：幼い頃からさまざまなスポーツを体験し、社会性やルールを身につけることが大切だと感じます。県内に同様の主旨のスポーツクラブが誕生していますので、広く伝えていきたいと思います。

田中氏：私が水泳を始めたのは母がケガをしてリハビリで水泳をしたのがきっかけです。今度は私が子どもたちの

きっかけのひとつになりたいと思います。

二宮氏：夢をかなえるにはまず現実を直視すること。個人も組織も矛盾しない「ウインウイン」の関係を構築すべきです。神輿と同じで誰かが手を抜いたら上がりません。皆が支えていく仕組みづくりが必要です。

最後に全日本社会貢献団体機構の松尾守人理事が現在スポーツ議員連盟で進められているスポーツ基本法を話題としてとりあげ閉会の言葉とした。

「その第一条は、スポーツによる地域の振興です。日本も変わってきています。ぜひ、皆様も機会があれば周囲の方に本日のフォーラムでの話を語ってください。地域の輪はそこから生まれるのではないかと思います」

## 企業は社会貢献をもっと気楽に考えた方がいい

愛媛県遊技業協同組合 理事長  
川井善廣さん

私自身、スポーツが大好きです。スポーツはそれ自体も楽しいのですが、人とのコミュニケーションがとれる。現在、いろいろなスポーツ大会に協力していますが、ただお金を出すのではなく、やはり参加することが重要です。それで家族なども参加するようになり、人間関係の輪が広がるのです。そういう観点から、愛媛県遊協では愛媛マラソンを単にバックアップするのではなく、みなで参加して、自分たちの大会としてサポートしているのです。

また、企業はもっと気楽に社会貢献に参加すべきです。なにかあって、続けられなくなったら、別の企業に任せればよい。先の先まであまり杓子定規に考えていたら社会貢献の機会を失いますよ。今できることをしようではないですか。